

原著論文

安部磯雄—その生い立ちと人格形成

藤枝 充子

Abe Isoo, His Early Years and His Personality

FUJIEDA Mitsuko

要 旨

本論文は、近代日本の家庭教育論の成立と展開に関する研究の一環として、日本の近代期に、国家を相対化して捉えるために必要な宗教や思想に触れていた安部磯雄（1865-1949）を取りあげている。そして、安部磯雄に関する先行研究の検討、さらに、彼の人格形成や人間観について、彼の生い立ちと関連づけながらまとめ、彼の考え方の中にある二つの人間観と、その二つの人間観を止揚することができなかった理由について考察した。

キーワード

家族 学校 生い立ち 人格形成 安部磯雄

目 次

- I. はじめに
- II. 先行研究の検討
- III. 生い立ちについて
 - 1. 家族の思い出
 - 2. 学校の思い出—「フェア」と競争主義
- IV. 弱者へのまなざし
- V. まとめと考察

注

文 献

I. はじめに

本研究は、近代日本の「家庭教育」論の成立と展開に関する研究の一環に位置づけている。そこで、本論文では、日本の近代期に、国家を相対化して捉えるために必要な宗教や思想に触れていた安部磯雄（1865-1949）を取りあげる。そして、安部磯雄に関する先行研究の検討、さらに、彼の人格形成や人としての生き方に関する考え方などについて、彼の生い立ちと関連づけながらまとめ、彼が示す二つの人間観と、その二つの人間観を止揚することができなかった理由について考察したい。

ところで、安部磯雄は多くの単行本を著しており、先行研究¹⁾は、それらの内容から、①社会全体の制度的なあり方に関する変革の要求を掲げたもの、②制度的な変革の潮流の中に、変革を推し進めてゆく主体としての個々人の生き方に関するものにと大別している。①と②は、彼の思想理解において密接不離の関係にある。とはいえ、本論文では、教育という人格形成に関する安部の思想を探求する立場から、主に②に該当する主体としての個々人の生き方に関する単行本²⁾や雑誌記事、安部の自叙伝や伝記を分析対象とする。

II. 先行研究の検討

安部磯雄は、東京専門学校時代から早稲田大学に28年間（1899（明治32）～1927（昭和2）年）勤め、その間、東京専門学校野球部（後に早稲田大学野球部）の創部と初代野球部長就任、数回の米国遠征など、学生野球の発展に寄与し、野球殿堂博物館には、野球殿堂入り第一号として彼の肖像レリーフが飾られている。その一方で、明治期、大正期、昭和期の社会主義諸政党の創立に関わるとともに、日露戦争では非戦論を唱え、1911（明治44）年には廓清会を組織して廃娼運動を推進、1920年代前後には産児制限論を活発に展開（1922（大正11）年産児調節研究会設立）するといった活動を通して、キリスト教社会主義者としても知られる人物である²⁹⁾。また、安部の品行方正な人柄は、同時代の人々から高く評価されている³²⁾。

本章では、安部磯雄に関する先行研究¹⁰⁻¹⁷⁾のうち、特に、安部の著述を、婦人問題、婦人論、家庭論の視点から分析している主な研究を取りあげ検討したい。

阿部恒久は、「安部磯雄と婦人問題」¹⁸⁾で、安部の婦人論の特徴と変遷、婦人問題との関わりを明治から昭和にわたり全体的に明らかにしている。それによると、中流階級の女性を対象とした婦人論の特徴としては、①キリスト教的家庭像・人間関係の根幹をなす一夫一婦制、②徹底した男女同権論による婦人解放論を指摘する。さらに、婦人問題との関わりでは、①あらゆる階層の女性を念頭に、階層によって異なる多面的な問題について、啓蒙活動や実際的な活動（産児制限や廃娼運動）を持続的に行ったこと、②多面的な問題の解決のために、現実主義的で柔軟性に富んだ対応をしたこと（しかし、この現実主義、柔軟性には、現状に追従する陥穽があったことも指摘している。）という二つの特徴を挙げている。

阿部氏の本研究から、安部の婦人論や婦人問題との関わりを俯瞰することができた。また、安部の婦人論の特徴である一夫一婦制には、安部の幼少期の生活や留学中の経験が由来しているとの指摘もあり興味深かった。しかし、男女同権論による婦人解放論がどのような経験に由来しているのか、さらに、安部の思想や行動の内実を掘り下げるといった視点は弱かった。

次に、坂本武人は、「安部磯雄の婦人論」¹⁹⁾で、1910年代に起きた婦人論ブームの特徴、安部が『理想の婦人』（北文館、1910。）で述べている婦人論、婦人問題の内容とその特色を論じている。そして、安部の婦人論の特徴として、①婦人は婦人であると共に人間であり、幸福のためにも、各人が持つ能力を引き出す努力を積み重ねなければならない、それは男女に違いはないとする、②大人・男子・資本家（強者）による子ども・婦人・労働者（弱者）の抑圧と侮蔑が、社会問題としての小児問題、婦人問題、労働者問題の根柢であるとする、③公明正大の精神に貫かれており、論理の修正や変更がなされなかったの3点を挙げる。特に②では、弱者の立場に立ち、抑圧されている条件を取り除くことによって、弱者に与えられた権利や任務を遂行しうるまでに、彼らの地位を高めなければならないという信念を持っていたと指摘する。

坂本氏の「抑圧された条件を取り除くことで、与えられた権利や任務を遂行できるようにする」という安部の信念の指摘は、後述する彼の性格との関連から興味深い、そのような信念を持つに至った内在的理由を解明しようとする視点は弱い。

広瀬玲子は、「解説」²⁰⁾で、『婦人の理想』(1910 (明治 43) 年) から安部の婦人問題論を検討し、「当時の婦人問題のありようとその解決への道を、極めて明確に指示している」²³⁾と評価しつつも、その弱点をも指摘する。弱点とされているのは、①対象としているのが一定の資産、能力のある中流以上の家庭の婦人であること、②歴史的に形成された婦人の「従順さ」「忍耐」を歓迎し、封建的女性観の残滓が垣間見えること、③婦人問題解決において、家族制度は否定、脱却すべきものであっても、止揚するものとは捉えられていないこと、の3点である。

広瀬氏の安部磯雄の弱点についての指摘は示唆に富むが、それらの弱点と安部の幼少期を中心とする経験とを関連づけようとする視点は弱い。

林葉子は、「廃娼論と産児制限論の融合—安部磯雄の優生思想について—」²¹⁾で、「なぜ『穏和な平和主義者』でさえ同時に『断種法』の奨励者であったのか」という問いを立て、安部の優生思想について、廃娼論及び産児制限論の視点から分析している。安部の優生思想の萌芽は、彼の最初の著述である『社会問題解釈法』(1900 (明治 33) 年) に見られること、そして、彼の「強壮なる身体」への拘泥が長女富士の病死によって強まったことなどを指摘する。

現代の私たちからみれば相反する二つの価値が併存していること、その萌芽が早い段階から見られること、そして、その人の生活と思想形成を関連づけていることなど、林氏の研究から多くの示唆をえることができた。しかし、本研究には、安部の幼少期を中心とする生い立ちと彼の思想や人格との関連の解明という視点は見られない。

以上、先行研究を検討してきたが、阿部氏及び坂本氏の研究から、時代状況、安部磯雄の婦人問題、婦人論、家庭論の全体像を理解するための有効な知見を得ることができた。また、広瀬氏及び林氏の研究からは、安部の婦人論の弱点や思想形成の背景に関する知見及び示唆を得ることができた。本論文では、先行研究の成果に学びながら、論者の問題関心である生活が持つ人間形成力の解明に向け、安部の幼少期を中心とする経験と彼の思想や人格形成との関連を探っていききたい。

Ⅲ. 生い立ちについて

本章では、自らが育った家族や学校の思い出に

ついて、安部磯雄がどのように語っているのかを、彼の自叙伝である『社会主義者となるまで』(改造社、1932)を中心に見ていきたい。

1. 家族の思い出

安部磯雄は、1865 (元治 2) 年 2 月 4 日、黒田藩士岡本権之丞とその妻久の次男として、福岡市新大工町に生まれた。磯雄が生まれた時の家族は、両親、祖父母、父の兄の妻 (伯母)、姉 2 人、兄 1 人の 9 名で、その他に下男 3 人、女中 3 人、さらに彼の乳母を抱えていた。磯雄が生まれた当時、父は馬廻り頭を、祖父は郡奉行職を務めていた。屋敷には、父が弟子を教えるための柔道場や家族のための浴室、さらに厩が備えられていた。石高は 200 石、黒田藩では下級武士階級であったが、近代日本におけるブルジョア階級に比する生活ぶりだったと、安部は回想している。しかし、明治維新により、屋敷の縮小や雇人全員の解雇など、その生活は大きく変化した。生活のため、兄は一時、綿打職工の徒弟をしていたこともあったという。祖父が他界する時、小学校に通っていた磯雄について、父権之丞が県庁に奉職していたことから、県庁の給仕に出してはどうかと語っており、生活の厳しさが感じられる。

安部は、幕末維新期の武士階級にとって変化の大きい時代に幼少期を過ごし、貧乏を経験した。この経験が、貧困問題の解決という、安部の生涯の課題に彼を導く要因の一つとなっている。

さて、安部は、父母の性格について書き残している。その記述は、安部の人格形成、人間観や人生観に影響があったと考えられるので、長くなるが引用しておきたい。

父の性格として最も深く私の心に印象を遺して居るのは勤勉努力といふことであった。(中略) 父が柔道、剣道、槍術、馬術等に上達して居たことを思へば、壮年時代に於ける彼が、如何に努力家であったか、想像される。(中略) 父は極めて温厚な人であった。私共兄弟姉妹は殆んど父に叱られたといふ記憶を有して居ない。殊に私共が父の美質として記憶して居ることは彼が常に楽観的であったといふことである。然らば父は交際的であり談論家であったかといふに決して左様ではなかった。寧ろ人の前に於ても、家庭に於ても寡言であり遠慮勝であるように思はれた。然し如何なる悲境に在っても彼の

顔は晴々として一点の曇がなかった。(中略)
これは修養の結果であるか、或は又天賦の素質に因るのであるか、私はこれを判断することが出来ない。^{注4}

このように、父の性格を努力家、温厚で楽観的であると親しみを込めて表現し、さらにその性格が修養の結果か天賦の素質かは判断できないと締めくくるところに、自らの欠点克服に努め、人格の修養を怠らなかった安部の思いが滲み出ている。それに対し、母の性格を語る安部の言葉には、異なる雰囲気がつきまとう。

母は父とは全く反対の性格を有して居た。一言にして言へば母は極めてヒステリックであった。私のみならず、他の兄弟達も母に叱られた経験を多分に有して居る。従って私共は母に親しむといふ気持ちになれなかった。然し母のヒステリーは発作的であって、常習的であったといふ訳ではない。これは一種の病気であるから、母自身もこれがため少なからぬ苦痛を感じて居たことであらうと思ふ。(中略)然し此欠点を除きさへすれば、母は実に主婦として完全なる資格を具備して居た。私の長姉は父の先妻の子であって、私の母は二人の男児と三人の女児を生んだ。今一つ私の家庭を複雑ならしめた事情がある。元来私の父は二男であったから、他家の養子となるべき身分であった。然るに岡本家を嗣いだ父の兄は妻を迎へて間もなく死んだのであるから、私の父は当然其相続者となったのである。封建時代には其習慣として相続者は被相続者を親と呼ぶことになって居るから、私の父は其兄を父と呼び、其未亡人たる嫂を母と呼ぶなければならなかった。私の母が岡本家に嫁した時には先妻の子がある上に、僅か五六歳の年長者たる嫂に母として仕へねばならぬといふ不自然なる事情が存在して居た。斯る複雑なる家庭の裡に飛込んで来た私の母の苦心に対して充分なる同情を禁じ得ない。母が義理の子に対して如何に親切であったかは親戚の間に評判となった位である。祖父母が逝き、長姉が嫁するに及び、一家の財政は全く母の手によりて処理されることになった。母が一家の実権を握るようになった時は既に岡本家は窮乏の途を辿らんとして居る際であった。此貧乏世帯を引受けて、兎に角六人の子供を其行くべき所まで行かしめ

たのは主として母の力であった。^{注5}

母が極めてヒステリックでありよく叱られたと回想する安部のこの記述から、温かい家族の中で過ごしたという感触や、子どもの母親に対する無条件の愛着や愛情、そして懐かしみを読み取ることは難しい。むしろ、近世から続く家族制度に基づいて成り立っていた自らの家族を「複雑なる家庭」と表現し、母の置かれていた状況を理解できるまでに成長した後、母の姿に心を寄せ、一家の主婦としての役割を懸命に果たそうと努力していた母を、同情をもって受け入れた姿が浮かび上がる。以下の文章からも、安部の家族や母親に対する同様の思いが読み取れる。

自分の生れた家などは、実に厳格に過ぎたもので子供を母親が膝の上に乗せると云ふやうな事は少しもしなかった。其結果であらう。自分の生みの母に対しても、真に麗しい燃えるやうな感情が持てなかった。『母上さん』と云ふ言葉は誰の耳にも優しく聞え、恰も愛の別名であるかの如くに感ぜられるのが普通であるのに、自分にはどうも其温味が失せて居たらしい。尤も、自分も親には愛をつくさねばならぬ、との理屈丈は明瞭に記して居たのではあったが。^{注6}

安部は、母の膝に乗り甘えることが許されないほど厳格な環境で、親には「孝養」を尽くさなければならぬという儒教に基づく道德観を教えられて育った。自身が育った家族が堅苦しい抑圧的な環境であったと表現する安部は、後述するように、その後、新島襄及び同志社英学校で「自由、平等、博愛」の精神を学び、欧米留学中は現地の家庭を実地に体験している。それらの経験を踏まえ、自分が築いた家庭では、「自由、平等、博愛」を原則とし、例えば、子どもの自由を尊重した教育（後述するように、身体を健康にする体育のみは強制）や階級的順序を避けるための言葉の平等（雇人も含め呼捨てにせず「さん」、「ちゃん」で全員が呼び合う）といったことを実践している^{22, 23)}。また、家庭論においても、親とは同居せず、一夫一婦制に基づく夫婦とその子どもからなる核家族が家庭の単位であると説明するなど、先行研究でも指摘されているように、近代以降に主流となるいわゆる近代家族のあり方を薦めている。

なお、「私は乳母に親しんで居り、乳母も亦私を実子の如く愛して居た」^{注7}とあることから、幼少期にあって彼が親しんだのは、母ではなく、乳母であったようだ。

ところで、岡本家の次男として誕生した彼は、自叙伝執筆の時点で安部姓を名乗っている。実は、彼は、数え年21歳（本文中、安部の年齢はすべて数え年で表記する。）で婚約するまでの間に、岡本、村上、竹内、安部と四つの姓を名乗っている。最初は、生後すぐに男児のいなかった祖父の実家である村上家に養子に入り、村上家に男児が誕生したため6歳の時に岡本の姓に戻った。次の竹内と安部の両姓は徴兵を逃れるため、徴兵免除の制度に合わせて養子先を探し養子に入ったためである。3回の養子縁組はいずれも、名義上の養子であった。

2. 学校の思い出―「フェア」と競争主義

次に、安部磯雄の学習や学校に関する思い出を見ていきたい。彼の学習歴、学校の思い出に触れると、彼の性格の一端を知ることができる。

彼の学習は、8、9歳の頃から、祖父に毎日教えられた論語の素読、つまり武士階級に見られた家庭内での学習に始まる。安部は、意味を説明せず、先ず読み方を教えるこの素読という「日本式」の教授方法を「実に不自然なもの」と述べている。そして、1873（明治6）年、9歳で家の近くの当仁小学に入学、「兎に角教育らしい教育を受けることが出来たのはどれだけ私の為に幸運であったかもしれない」と、近代学校教育制度の開始とほぼ同時に「泰西式」の小学校教育を受けられたことを幸運とし、石盤、石筆そしてお弁当を持って学校に通うことが楽しみであったという^{注8}。幼い子どもらしい感覚とともにある最初の学校の印象ではあるが、そこでの生活は呑気なもので、学校生活そのものの記憶ははっきりしないらしい。そのような安部の学校への姿勢が、1875（明治8）年の福岡県立教員伝習所（後の福岡第一師範学校）付属小学への転校により180度転回する。その理由として、第一に付属小学の同級生40名が各小学から選抜された児童たちであったこと、第二に付属小学には競争制度が設けられていたことを挙げている。この付属小学での競争制度とは、年3回程度行われる試験により成績順位が発表され席順が入れかえられる、さらに進級試験や臨時試験の場合は賞品が与えられるというものである。

付属小学に通うことで、「学問といふことに対する興味を喚起されたのみでなく、競争といふことに対する基礎的修養をなし得たやうに思ふ」^{注9}と、安部は振り返っている。選ばれし同級生の間に繰り広げられる「フェア」な競争とその中で努力し、周囲より秀でることのでられる誇りは、安部の学校の思い出に繰り返し登場する語り口である。

さて、小学校卒業後、3か月という短期間ではあるが漢学塾で学び、ここで自学自修という学習方法を身につけた。その後、義兄からの経済的援助を得て、同志社英学校に進学できることになった。その時の心境を、「私を満足せしめたのは、附属小学の同級生中私が郷里以外の地に遊学する率先者であるといふ誇りであった。小学に於ては決して他人に後れをとらなかった自分が、今又衆に先んじて京都に遊学するといふことは私の競争心を満足せしむるにはこれ以上のものはなかった」^{注10}と吐露しており、先述した語り口が示されている。そして、同志社英学校でも、自修主義と競争主義が取られていたが、「私は附属小学時代に於けると同様に、否それ以上に競争心を奮ひ起した。其の当時に於て京都まで遊学する程の青年には相当の自信力があるべき筈であった。だから私の同級生の大部分が何れも小学時代に於ける優等生であったことは言ふまでもない。私は附属小学に於けると同じく同志社に於いても第一位を争はねばならぬと決心した」^{注11}と、持ち前の競争心を発揮している。

安部が、同志社英学校在学中に、新島襄とキリスト教に出会い影響を受け、生涯ぶれることがなかったとされる思想の基盤を形成したことは周知の事柄である。安部は新島襄を、「理智の人といふよりも寧ろ情熱の人」、「東洋流の英雄と基督教の紳士との二分子」から構成された人、「東洋的英雄といふ素質に基督教の磨きをかけた」^{注12}人格の持ち主であり、「同志社精神の原動力であり指導者であった」^{注13}と評している。新島襄が模範を示した「平民主義」、「自由、平等、博愛」の精神と、同志社の精神教育の土台であったキリスト教、それらに接し、理解し、自らの経験と重ねながら消化していく中で、安部は自らの思想を形成していく。

私が臍氣ながら今日の所謂社会問題といふことを考へるようになったのは十六七歳の頃から

であった。(中略) 清浄無垢なる霊地(相国寺、引用者注)に於て、此世ながらの地獄を見せつけられることが屢であった。(中略) 松樹の下で一夜を過したらしい乞食も見た。空腹を訴へて居る旅人、動くことの出来ぬ行路病者をも見た。(中略) 私は此等の事実疑問を持つようになった。私にはまだ貧乏は如何にして生じたかといふが如き疑問を起すだけの能力はなかったけれども、貧者に対して同情するといふ心は充分に有して居た。これは必ずしも基督教の精神から出発したものではない。(中略) 私が比較的早く貧乏問題に対して関心を持つようになったのは全く自らの経験から来たものである。明治維新のために私等武士階級に生活の大変動が来たことは前に述べた通りである。私は幼年時代から貧乏生活を続けて来たのであるから、貧乏に対して強い同情を有して居ることに何等不思議はない。(中略) 基督教は人類の精神的方面に解決を与へることが出来るけれども、物質的方面の幸福を与へることは出来ない。(中略) 基督教を以て人類を精神的に救ひ、何等かの方法を以て人類を物質的に救はねばならぬといふのが私の希望する所であった。(中略) 私が十九歳となった明治十六年の秋初めて経済学を学んだ時私の疑問は大部分解決したように考へた。即ち精神生活は宗教により、物質生活は経済学によりて指導さるべきものであるといふ結論に達した。^{注14}

身近に目にする貧困という事実、自らの経験、貧困者への「同情」、貧困への疑問とそれを解決したいという思い、これらを積み重ね、経済学を知った安部が、同志社英学校の卒業演説の題目に選んだのは「宗教と経済」である。その後、留学先で当時の社会主義に触れた安部は、貧困問題解決のための方策として社会主義思想を吸収し、「日本社会主義の父」と評されるまでになっていく^{注15}。

1884(明治17)年同志社英学校を卒業した安部は、同志社神学科に進学するが教授内容への不満から自主退学、郷里福岡に戻った。その後、村上駒尾との婚約、福岡県田川郡にある香春学校への奉職、教師として同志社英学校に赴任するなどを経て、1887(明治20)年4月23歳で岡山教会の牧師となる。約3年半、牧師として過ごした後、岡山教会教会員の了承を得て、1891(明治24)

年8月27歳でアメリカ合衆国のハートフォード神学校に留学、3年後同校を卒業、さらにドイツのベルリン大学に入学した。この留学期間中、安部は、自らの課題である聖書の歴史的価値の研究及び社会問題の研究に取り組んだ。

同志社英学校卒業からアメリカ合衆国及びドイツへの留学に至るまでの思いを、安部は以下のように正直に振り返っている。

私は宗教問題を解決するには独逸に留学することの如何に必要なかを感じて居た。言ふまでもなく私の宗教思想に変動を来したのは新神学であつて、新神学の本場は独逸である。(中略) だから米国に於ける三年の課程を終った後には是非独逸留学の計画を立てねばならぬ。これが其当時に於ける私の決心であつた。斯る場合に於ても私に低級なる競争心が絶えず働いて居た。附属小学卒業後第一に郷里を出で、京都に遊学したのは私であつた。同志社卒業の時に於ても私は同級生中可なり優秀なる成績を挙げた。然るに今は果して如何。同級生十八人中七人は既に洋行して居るのに、私は全く落伍者となつて居る。これは余儀なき運命のためであるとは言へ、余りにも口惜しきことである。然し同級生の洋行は何れも米国だけに限られて居るのだから、若し私が独逸に洋行することになれば、忽ちにして名誉を回復することが出来る。斯くして私は依然として同級生の先頭に立ち得るのである。これは実に世間並の小名誉心であつて、今から考ふれば赤面の至りであるけれども、其当時の気持がその通りであつたことは事実である。^{注16}

アメリカ合衆国、続けてドイツに留学することの意味が、純粋な学問探求への思いだけでなく、同志社英学校時代の同級生との間にあると安部が感じていた後れを取戻し一歩先んじるためという競争心であつたこと、さらに、自らの「低級なる競争心」や「小名誉心」を自叙伝の中に書き残すところに、彼の性格が出ていて興味深い。自嘲気味の表現を使つてはいるものの、安部にとって、競争心や名誉心は努力の原動力であり、否定したり隠したりするものではないのであろう。そして、明確な意志をもって留学したハートフォード神学校での3年間、安部は持ち前の負けん気を發揮して学生生活を充実させたが、勉学における努力と

その成果はドイツ留学を実現するためにも活用している。

神学校には学生を奨励するため、種々なる科目に於ける優等生に賞金を与へることになって居た。一年の課目はヘブライ語、二年は組織神学、三年はギリシャ語と実際神学とに各五十弗の賞金が懸けられて居た。私は別に賞金が欲しいといふ訳ではなかったけれども、日本人の学力を示すといったやうな小名誉心から、ヘブライ語のため多少の努力を試みることになった。然し同級生の中に一人の競争者が現はれた。彼は侮るべからざる勉強家であったため、試験の結果賞金は彼と私とに二分されることになった。二年級の賞金は組織神学の優等生に与へられるといふのであるから、私は此時にもそれを目的として勉強した。(中略)試験成績の発表により、私は幸ひにして独りで賞金を得ることが出来た。三年級の賞金はギリシャ語と実際神学に与へられるといふのであるから、私は全然競争といふことを断念した。同級生の中にはギリシャ語に於ける抜群の学生が一名居たのと、実際神学とは説教とか教会指導とかを意味するのであるがため、私には全く競争の余地がなかったのである。然し私が二度賞金を得たといふことは教師の信用を得るには充分であつて、私が遂に独逸に留学することが出来るやうになったのも、此事が間接に其原因となつたのではないかと思ふ。^{注17}

ハートフォード神学校の3年間で2回賞金を与えられ、卒業演説(演題は「基督教徒の経済観」)にも選ばれている。このような自らの努力を踏まえ、卒業を控えた安部は、ドイツ留学への途を拓くため、ハートフォード神学校校長に留学のための適切な方法について教を乞う手紙を書いた。「私は此手紙を校長に送って以後毎日どんな結果になるかといふことを心配しながら待つて居た。兎に角自分は入学以来相当の成績を挙げて居るから、まさか校長がこれを無視するやうなことはあるまいと自分勝手な憶測をしたこともあった」^{注18}と、留学中もそして自叙伝を著す時点でも、自らの努力と成果に自信を持ち、努力とそれに伴う成果は必ず報われると考えていることがわかる。事実、校長は篤志家の資金援助をとりつけ、安部のドイツ留学は果されている。しかし、1895(明

治28)年1月、前年に岡山を襲った大洪水とそれに伴う岡山教会大打撃の知らせを受け、ドイツ留学を5か月で切り上げ、帰国することになった。

IV. 弱者へのまなざし

ここまで、家族と学校の思い出についての安部の語りから、彼の人格や人生観に関連するものを見てきた。本章では、彼の人間観の内実について考えたい。

安部が、自らの経験によって、キリスト教に接する以前から貧困者への「同情」心を持っていたことはすでに述べた通りである。また、留学中に行った社会事業視察、その後に行った石井十次^{注19}の孤児院への支援や廓清会における廃娼運動などからも、彼が、社会的弱者に「同情」のまなざしを向けていたことは明らかである。

現今の社会に於て弱者と称すべきものが三つあります。即ち女子と子供と労働者であります。女子は男子の為に、子供は両親の為に、労働者は資本家の為に種々なる侮辱と虐待を受けて居るといふことは争ふことの出来ない事実ではありませんか。私共が立憲政治を叫び平等主義を唱へて居るのは全く此等の弱者に同情するからであります。否私共は単に私共の道徳心より同情するといふのではなく、彼等の位地を向上させざれば私共人類の為に大なる不利益であると考へて居るのであります。(中略)私共の家庭には此弱者たる三階級が存在して居ります。換言すれば私共の家庭組織には此最も重要な社会問題を包容して居るのであります。^{注20}

安部は社会的弱者として女性、子ども、労働者を挙げ、この三者すべてが家庭には存在しているという。そして、社会問題の原因を「強者と弱者の争」、「弱者に対する強者の圧迫」^{注21}に置く彼は、この三者を救う政治が国民に平等の権利を与え、その権利を尊重する立憲政治であり、「国政を立憲的ならしめんと思ふならば、先づ家政を立憲的ならしむることが必要」^{注22}であるとし、家庭改良の精神的方面のあり方に言及していく。

彼は、日本には、「夫本位の家庭」、「妻本位の家庭」、「子供本位の家庭」の3種類、加えて、極めて少数ではあるが「夫婦本位の家庭」もあると指摘する。家庭の目的を家族員全員の幸福の増大

に置く安部にとって、これら4種の家庭は、家族員の一部を中心に置いているという点で、どれも理想の家庭とは言えない。しかしながら、最も弊害の少ない家庭のあり方は、子どもの幸福を第一に考え、すべて子どもを中心に家庭を運営する「子供本位の家庭」であるという。なぜならば、第一に強者（夫や妻、子どもにとっては親）本位の場合、圧制になる可能性があるが、弱者（子ども）本位であればその恐れがない、第二に子どもは親よりも家庭が必要である、即ち家庭の目的は主として子どもの教育にある、ためである^{注23}。

このように、安部は、弱者に「同情」のまなざしを向け、彼らの社会的地位を改善、向上させることが社会全体のためにも必要であると考えていた。しかし、その一方で、次のような一面も見せる。現在では使用されない不適切な表現があるが、安部の言葉であることから修正せずに紹介したい。

或程度までは遺伝病者、伝染病者の結婚を禁ずることは必要である。若し子孫の幸福を想はゞ或国に於けるが如く、法律を以て強飲者、遺伝病者、伝染病者の結婚を禁止するのは至当であろう。然れども此等の事は決して法律の力を待つまでもないことで、真に己を思ひ、子孫のことを慮る所の人ならば自ら進んで独身の生涯を送るべきではないか。（中略）或場合の独身生活は吾人の義務であると言はねばならぬ。^{注24}

安部は、「強飲者」、「遺伝病者」、「伝染病者」の結婚と彼らが子どもを持つことを法律で禁止することを容認し、さらに、法律に頼るまでもなく当人が進んで生涯独身を通すことを義務であるとまで述べている。

上の引用文の出所である『理想の人』が出版されたのは1906（明治39）年10月5日、安部は、同年3月10日に、長女富士を脳膜炎で失った。長女の発病から死に至るまでの懸命な対応、失った時の悲しみ²⁴⁾とその悲しみを生涯にわたり持ち続けたことは、彼の親としての愛情が深かったことを示している。しかし、「脳膜炎は実に惨酷な病気であります。幸にして死を免れたとしても結局低能者たることは免れません。私共は富士子が静かに息を引取りました時に一種の安心をさへ感じました」^{注25}とも書いている。安部は、長女の死後、子どもの教育方針を改め、体育を第一、学問

を第二とし、子どもの身体を健康にするための体育についてだけは強制するようになったという。

『理想の人』は、長女が亡くなった約7か月後に出版されており、安部が、身体が健康で丈夫であることの大切さを痛感した時の記述と考えることはできる。しかし、「低能者」として生き続けることに対する不安、「強飲者」、「遺伝病者」、「伝染病者」が生涯独身で過ごすべきという発想に、安部が理想とする、国民に平等の権利を与え、その権利を尊重する立憲政治においては、権利主体たる人間と権利主体たり得ない人間がいるという人間観、権利主体たり得ない人間（安部の言葉では、「強飲者」、「遺伝病者」、「伝染病者」）は、将来の社会全体のためにもその数を減らし社会からなくしていく（安部の言葉では、結婚を禁じ、子孫を残さない）必要があるという人間観を読み取ることも可能である。そして、この発想が、先行研究でも触れていた彼の優生思想へとつながっている。

V. まとめと考察

ここまで、安部の生い立ちについての語りや人間観の内実について述べてきた。本章では、安部の幼少期を中心とする経験と彼の思想や人格形成との関連について考えてみたい。

先行研究の中で、安部の思想や人格形成に影響があったと指摘されている彼の経験は、幼少期の生活の激変と貧困、母の姿、同志社英学校での新島襄及びキリスト教との出会い、欧米への留学、長女の死である。論者は、これらに加えて、選ばれた仲間の中に繰り広げられる「フェア」な競争とその中で努力し、周囲よりも秀でることによって得られる誇りという、彼が学校教育の中で繰り返し経験したことも、彼の思想や人格形成に影響を与えていると考えるに至った。自叙伝という資料の特質を踏まえて言い換えば、自らのそのような経験を繰り返し自叙伝に書き残したことが、彼の人格や思想への影響の大きさを表している。

安部は、キリスト教の「自由、平等、博愛」の精神に基づき、男性も女性も人間として同じ権利を持っており、人間は幸福のために自らの能力を発達させ続けること、自らの理想を掲げその実現に向け努力することが大切であると述べている。しかし、現実の社会では、「小児と婦人と労働者は何れも重要な任務を有して居るにも拘ら

ず、比較的冷淡なる待遇を受けて」^{注26} いる。「冷淡なる待遇」、すなわち抑圧された条件のために、自らの「重要な任務」、すなわち与えられた権利や任務を阻害される場合は、抑圧された条件を取り除くことで、与えられた権利や任務を遂行できるようにしなければならない。そうでなければ「フェア」な競争のスタートラインに立つことすらできない。そして、それは同時に、抑圧された条件を取り除きさえすれば、「フェア」な競争のスタートラインに立つことのできる人間にだけ向けられる限られた「同情」にもなる。

安部が、明治、大正、昭和を通して、社会的弱者救済のために行った活動は、高く評価されるべき事柄である。安部が意識的にこの二つの人間観を獲得し、これらをあえて止揚しなかったとは考えにくく、学校での経験や時代的傾向の中で形成され強化されていったと考えられる。そして、二つの人間観の止揚を難しくした「フェア」とその下での競争に高い価値を置く安部の思想は、生活の中で繰り返された経験が人格形成や思想形成に影響を与えた結果と言えるであろう。

なお、本論文では、彼の生い立ちと人格形成、思想形成との関連に着目したため、人格や思想に影響を与える外在的要因との関連は検討できていない。今後の課題としていきたい。

注

- 注1 ②の主体としての個々人の生き方に関する著書として、『理想の人』(1906),『婦人の理想』(1910),『自修論』(1914),『子供本位の家庭』(1917),『青年と理想』(1936)がある。
- 注2 例えば、週刊『平民新聞』第2号,(1903(明治36). 11. 22.)の「同志の面影(一)」では、幸徳秋水が、「マン円く肥て小児のやうな顔をして、言語は明晰で態度は沈着だ、そして公平な人、高潔な人、如何にもマジメな人、コンナ欠点のない人を見たことがない」と安部磯雄を表現している。
- 注3 広瀬、「解説」中島邦監修、広瀬玲子解説、『近代婦人問題名著選集 第三巻 婦人の理想 安部磯雄著』日本図書センター、p.5 (1982)。
- 注4 安部磯雄、『社会主義者となるまで』改造社、p.10-12 (1932)。本論文では、山泉進解題、『学術著作集ライブラリー 安部磯雄著作集第6巻 社会主義者となるまで』日本図書センター、(2008)。収載のものを引用した。なお、旧字体は新字体に改め、旧仮名遣いはそのままとし、読みやすくするために必要に応じて句読点を加えた。以下、本文中、引用については同様の手続きをとった。
- 注5 前掲『社会主義者となるまで』、p.12-13。
- 注6 安部磯雄、「婦人の二大事業」『家庭雑誌』第2巻第7号、p.5 (1904. 7. 2.)。
- 注7 前掲『社会主義者となるまで』、p.24。なお、この引用部分は、磯雄が13歳頃、西南戦争のことを思い出し、度々乳母の家(店)を訪れたことを振り返った記述である。
- 注8 前掲『社会主義者となるまで』、p.14-15。
- 注9 安部磯雄、『青年と理想』岡倉書房、p.159 (1936)。
- 注10 前掲『社会主義者となるまで』、p.39-40。
- 注11 前掲『社会主義者となるまで』、p.45。
- 注12 前掲『社会主義者となるまで』、p.82。
- 注13 前掲『青年と理想』、p.166。
- 注14 前掲『社会主義者となるまで』、p.100-102。
- 注15 例えば、高野善一編著、『日本社会主義の父 安部磯雄』『安部磯雄』刊行会、(1970)がある。
- 注16 前掲『社会主義者となるまで』、p.166-167。
- 注17 前掲『社会主義者となるまで』、p.193-194。
- 注18 前掲『社会主義者となるまで』、p.207-208。
- 注19 石井十次(1865-1914)は、明治時代のキリスト教社会事業家として知られる人物である。岡山医学校在学中、孤児救済を志し、1887(明治20)年岡山市内に岡山孤児院を設立した。その後、医学校を中退して、孤児・貧児の保護事業に専念した(『コンサイス日本人名事典』第5版、三省堂、(2009)参照)。
- 注20 安部磯雄、『子供本位の家庭』実業之日本社、p.272-273 (1921)。本論文では、湯沢雅彦監修、『「家庭・婚姻」研究文献選集3 子供本位の家庭』クレス出版、(1989)。収載のものを引用した。
- 注21 前掲『子供本位の家庭』、p.271。
- 注22 前掲『子供本位の家庭』、自序 p.2。
- 注23 前掲『子供本位の家庭』、p.39-50。
- 注24 安部磯雄、『理想の人』梁江堂、p. 248 (1906)。

本論文では、平民社資料センター監修、編集・解題山泉進、『平民社百年コレクション第3巻 安部磯雄』論創社、(2003)。収載のものをういた。

注25 前掲『青年と理想』, p.116-117.

注26 安部磯雄、『婦人の理想』北文館、自序p.1 (1910)。本論文では、中寫邦監修、広瀬玲子解説、『近代婦人問題名著選集 第三巻 婦人の理想 安部磯雄著』日本図書センター、(1982)。収載のものをういた。

文 献

- 1) 早稲田大学校史資料室編、『安部磯雄 その著作と生涯』早稲田大学教務部、(1964)。
- 2) 安部磯雄、『産児制限論』實業之日本社、(1922)。
- 3) 片山哲、『安部磯雄伝』毎日新聞社、(1958) (『伝記叢書 86 安部磯雄伝』大空社、(1991)。
- 4) 高野善一編著、『日本社会主義の父 安部磯雄』『安部磯雄』刊行会、(1970)。
- 5) 浪川七五郎、『解説』『伝記叢書 86 安部磯雄伝』大空社、(1991)。
- 6) 山崎宗太郎、『私の出会った人びと—安部磯雄』『大阪女学院短期大学紀要』第30号、(2001)。
- 7) 山泉進、『解題』平民社資料センター監修、編集・解題山泉進、『平民社百年コレクション第3巻 安部磯雄』論創社、(2003)。
- 8) 山泉進、『安部磯雄著作集 解題』山泉進解題、『学術著作集ライブラリー 安部磯雄著作集第6巻 社会主義者となるまで』日本図書センター、(2008)。
- 9) 井口隆史、『安部磯雄の生涯 質素之生活 高遠之理想』早稲田大学出版部、(2011)。
- 10) 辻野功、『明治期の安部磯雄』同志社法学会『同志社法学』Vol.20 No.6 (第112号)、(1969)。
- 11) 辻野功、『安部磯雄の家庭論』同志社大学人文科学研究所、『キリスト教社会問題研究』第20号、(1972)。
- 12) 辻野功、『キリスト教社会主義者安部磯雄』『文学』第47巻第4号、岩波書店、(1979)。
- 13) 小林輝行、『近代日本の家庭と教育』杉山書店、(1982)。
- 14) 宮本盛太郎、『宗教的人間の政治思想 軌跡編—安部磯雄と鹿子木貝信の場合—』木鐸社、(1985)。
- 15) 荻野富士夫、『“冬の時代”における安部磯雄の社会主義観』早稲田大学社会科学研究所 (安部磯雄研究部会)、『研究シリーズ 26 安部磯雄の研究』、(1990)。
- 16) 出原政雄、『第一次大戦期における安部磯雄の平和思想』志學館大学法学部、『志學館法学』創刊号、(2000)。
- 17) 岡本宏、『安部磯雄—平和論と国家論の脆弱性』『久留米大学法学』第45号、(2002)。
- 18) 早稲田大学社会科学研究所 (安部磯雄研究部会)、『研究シリーズ 26 安部磯雄の研究』、(1990)。
- 19) 同志社大学人文科学研究所、『キリスト教社会問題研究』第13号、(1968)。
- 20) 中寫邦監修、広瀬玲子解説、『近代婦人問題名著選集 第三巻 婦人の理想 安部磯雄著』日本図書センター、(1982)。

21) 日本女性学学会誌編集委員会、『女性学』Vol.13、(2006)。

22) 安部磯雄、『青年と理想』岡倉書房、p.82-96 (1936)。

23) 安江政吉、『親心』横浜教材出版社、(1938)。

24) 安部磯雄、『亡児の記念』『新紀元』第6号、(1906. 4. 10.)。

本論文は、科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (基盤研究C) 「近代日本における家庭教育論の成立と展開—保育所保育独自の意義と役割の解明の為に—」 (課題番号24531025) の助成を受けて行っている研究の成果の一部である。